御堂龍彦の事件簿２～ある老人の死～

祁崎月久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御堂龍彦の事件簿２～ある老人の死～

【Ｎコード】
Ｎ０４４５Ｆ

【作者名】
祁崎月久

【あらすじ】
知人の葬儀で、龍彦はアザゼルと再会するが、その二人の前で、「祖父は殺されたのだ」と断言する、ある女性。真偽を確かめるべく、二人は請われるまま調査を開始する

1.

1.

大木鈴道といえば、龍彦の父方の一族とは古くから付き合いがある老舗和菓子屋の先代の主であり、幼い頃の龍彦を初めとする親族の子供達には長い間「怖いおじいさん」という印象で以て敬遠されていた人物だった。

しかし、長い交流が事実である以上、今は御堂家とはほとんど関わりを持たない龍彦も、父に名代を頼まれては葬儀に参列しないわけにはいかなかった。

今にも雨が降りそうな空の下、龍彦はタクシーを降り斎場へ足を踏み入れる。一足先に従弟の泰明が来ているはずだが、会うことは難しそうだった。泰明は個人ではなく、茶道の御堂流家元としてここにいる。

受付をすませ、焼香の列に並ぶ。思った以上に参列者が多かった。七十を過ぎても現役を退かなかった鈴道氏には、仕事上の知り合いだけでなく友人もたくさんいたようだ。

前方だけしか注意していなかった龍彦の肩が、唐突にぽんと叩かれた。顔を動かし、危うく彼はこの場の空気にかまわず絶叫してしまうところだった。

「久しぶり。どうしてこんな所にいるのだ？」

パンツスーツの喪服姿。くっきり整った美貌と緑の目、顎までの長さの黒髪を揺らして龍彦に笑みを見せている人物。

龍彦が今まで生きてきた中で、最も会いたいような会いたくないような、未だに判断に迷う者がなぜかそこにいた。

「……うちと関係あるから、父の代わりに……」

後ろに並んでいる人から迷惑そうにされているのに気づき、あわてて前進してから龍彦は答える。

「お前こそ何で」
「うむ。話せば長いのだが」
アザゼル・アンヘルという名前以外謎に包まれている美貌の持ち主は、ちょっと困ったような顔をした。
「大木氏の友達の従弟の奥さんの教え子の子供の叔母が、私の身内と仲がよくて、今回の訃報を聞いて変わりにお焼香をしてほしいと頼まれたのだが、都合が悪くなったので私が代理できたのだ」
「……遠くて何が何だかだな」
そもそも、そんな遠い間柄で、わざわざ焼香することもないと思うのだが、死者を悼む気持ちは尊いので別にかまわないかもしれない。
「なんでも、その人は大木氏のところで働いていたことがあったようで」
「いや、最初からそう説明しろよ」
こういう場ではあるが、龍彦はつっこまずにはいられなかった。
「縁は異なもの味なものといういい例だな」
「そうだけどややこしいだろうが」
などとやっていると、順番が回ってきた。龍彦とアザゼルは並んで手を合わせ、再び外へ行く方向へ足を向ける。
「大木鈴道氏は、なかなか資産家なのだな」
ずらりと並んだ花輪の送り主を一瞥し、アザゼルは呟いた。
「あ、あれはたっちゃんの家のものか？」
その中の一つ、『御堂』と書かれているのを指し示されて、龍彦はうなずく。
「かなり昔から、ここの和菓子を入れてもらってて。あ、本家が茶道の家元なんだ」
「ほう」
「でも見た目も怖い人だったから、子供の頃は絶対近づかなかったな」
「家同士の知り合いだったのか」

「そういう感じだから、個人的に親しくはしてなかったけど」
ただいつも、背筋をしゃんと伸ばした見た目にも快い印象の人だった。老いすら彼を恐れているようにも思えた。
だが、今回の訃報はそれほど意外ではなかったのだ。少し前から体調を崩し、自宅で伏せっているという知らせは聞いていたから。
「あの人は？」
アザゼルの声が、追想から龍彦を呼び覚ます。緑の視線の先を探して、そこに喪服姿の中年女性を見出した。
「大木さんの奥さんだよ」
「……若いな」
「後妻だからな。結婚して十年くらいだったかな」
名前は確か、多希子。四十五歳だったろうか。
疲れ切ったような面差しの未亡人は、次々に帰っていく弔問客に深々と頭を下げている。
「あの人が殺したのよ」
冷たい声は、後ろから聞こえた。
驚いて振り返った龍彦は、そこにいたどこか懐かしい女性に当惑する。
いつか会っていたような気がする。かなり昔に。
「……御堂さんのところの……龍彦さんですか？」
それは彼女も同じだったのか、一瞬目を細めたあと、自信なさげに尋ねてくる。その声で呼ばれる自分の名前が、古い記憶を一気に覚醒させた。
「晴海さん……？」
鈴道について、時々遊びに来た小さな女の子。御堂の子供達の中で一番年長だった龍彦のあとをよく追いかけてきていた。
鈴道の孫だ。
「はい。中田晴海です。お久し振りですね……龍彦さん」
今は二十歳になっている女性は、親しみの籠もった微笑を浮かべた。

2.

なぜかちゃっかりアザゼルまで同席している大木家の古めかしい居間は、線香の匂いと寒々しさが漂っていた。遺族達は今日はこちらには戻らないらしい。

「祖父は自宅で葬儀を、といっていたんですが、やっぱり狭いですから」

おくやみの挨拶が済んだあと、お茶をだしながら晴海は言った。

「龍彦さん、ほんとにわざわざありがとうございました」

「いえ。昔お世話になったし……」

親しくはなれなかったが、決して故人を嫌いではなかった。

その気持ちを、晴海もくみ取ってくれたようだった。

「この人と知り合いなのか？」

もくもくと茶菓子を食べながら、アザゼルが質問をしてくる。行儀のいい仕草だがどこか子供じみた様子に、龍彦は思わず苦笑していた。

「亡くなった鈴道さんのお孫さんで、小さい頃よく遊んだんだ」

「ふむ。青いレモンの味か」

「……何だそれ？」

「そういう歌がなかったか？」

「いや知らん」

訳のわからないやりとりに、晴海はくすくす笑う。いたたまれず龍彦が居住まいを正すと、彼女は今度はアザゼルの方に顔を向けた。

「アンヘルさん……でしたよね。中学校くらいからは少し疎遠になったけど、龍彦さんや今の家元とは、ずいぶん遊んでもらったんです」

「家元？」

「あれ、ご存じなかったんですか？　茶道の御堂流。龍彦さんそこの一族の方なんですよ」
「それは知っていたけれど……相当有名な家なのだな」
実家の紹介をされるのは、正直龍彦には面はゆい。
何しろ、茶道の手ほどきを受けてしばらく経ってもなじめず、結局やめてしまったという一族の中では異端の存在なのだ。現家元泰明とは幼い頃からの交流が耐えていないが、叔母を初めとする年長者達は、そういうわけで未だに苦手である。
その後も続いた二人の会話には参加せず、龍彦は無言で茶を啜った。
「……晴海さん」
そして二杯目のお茶を三人とも飲み終わる頃、アザゼルが一見さりげない調子で切り出した。
「おじいさんが殺された、という先ほどの発言はいったい？」
和やかだった室内の空気が、その瞬間一層温度を失ったように龍彦は感じ、小さく震えた。
晴海は表情を強ばらせ、しばし視線を彷徨わせていたが、やがて目の前の茶碗に視線を落とし、ぽつりと言葉を落とした。
「あの人……多希子さん。祖父の世話を一生懸命しているって、近所の人も親戚も言っていたけど……」
顔は見えない。けれど、龍彦は彼女が泣いているような気がした。
「でも、ほんとは違うと思うんです。だって私、見たんです」
「何を？」
柔らかく先を促すアザゼルの声が合図だったかのように、再び晴海はゆっくりと面を上げた。そこにあるのは、疑惑と不安と――恐怖。
「祖父の容態が悪化した日、私もその場にいて。たまたま見たんです……あの人の化粧台の中に、毒薬を」

3.

「毒薬、には違いないな」
自称最終学歴医大卒のアザゼルは、問題となった薬物を調べてそういった。晴海がこっそりと持ち出したのを、調べてほしいと頼まれたのだ。
「何だったんだ？」
「少量ならば、むしろ健康になる薬だ」
「そうか」
鈴道氏の葬式から、一週間経っていた。龍彦は晴海から『毒薬』を受け取り、カプセルになっていた薬をアザゼルに渡し、瓶だけを先に晴海に返した。薬の分析結果がでたというので、適当な喫茶店でアザゼルと落ち合ったところだ。
「具体的には？」
「ぶっちゃけていうと、高血圧の薬だ。鈴道氏の血圧は？」
「俺は詳しくは知らないけど……」
「なぜ彼は亡くなったのだ？」
「肺炎だって聞いた。それでなくても、少し前から具合が悪かったらしい」
「ふむ」
アザゼルはしばらく黙っていたが、
「詳しいところを知りたいな。薬が誰のものだったのかも。可能性から言うと、多希子さん自身のものというのが一番納得できるが」
「そうだな」
コーヒーは互いにからになっている。揃って立ち上がり、龍彦はアザゼルの細い手の中から伝票をするりと抜き取った。
「おごってくれるのか？」

「今回はまきこんだようなものだからな」
少し低い位置で、アザゼルが嬉しそうに微笑んだ。
「ありがとう」
それはとても美しかったのだが、一瞬だけ目に焼き付けるに留めて、龍彦はさっさと会計をすませる。
見とれてしまいそうだったから。

晴海の話では、鈴道氏は血圧は高かったが、それほどひどくはなかったという。
「多希子さん？　さあ、聞いたこともなかったわ。まだ若いし、大丈夫なんじゃないかな」
未亡人については、本当に知らないことが多いようだ。他にいろいろ尋ねても、晴海の答えはあやふやだった。
「ごめんなさい、役に立たなくて」
「いえ。しかたないですよ」
小さなマンションで、晴海は一人暮らしをしていた。女性らしい内装に落ち着かないものを感じつつ、龍彦は久しぶりに会う幼馴染みを改めて観察していた。
記憶にある姿は幼すぎて比較対照にならないが、本当に彼女は綺麗だと思う。大きくなって、としみじみしてしまう自分が年寄り臭くて少し悲しい。
「龍彦さん」
声の調子を変えて、唐突に晴海はじっと龍彦の顔をのぞき込んできた。
「あのアザゼルさんって、彼女さんなんですか？」
「へ？」
きっと、自分は珍妙な表情をしていたことだろう。
「龍彦さん？」
「あ……いやいや」

苦笑しつつ、軽く手を振ってみせる。
「あいつ、婚約者がいるそうですから。会ったことはないけど」
「そうなんだ。並ぶとすごくお似合いだったから、てっきりそうだと思って」
お似合いだったのか。
しかし、そういわれても龍彦は複雑なものを感じずにはいられない。何しろアザゼルの性別すら知らないのだから。
女性の柔らかさと、男性の強さ。あの瞳からはそのどちらも見て取ることができる。両性のよいところだけをほどよく混ぜ合わせたような、不思議な魅力がアザゼルにはある。
「綺麗な人ですよね」
「ほんとに」
うなずいて、こっそり心の中だけで付け加える。
――何をしでかすか予想もつかなくて片時も目を離せない、と。

4.

多希子と話すための口実は、従弟に頼むとすぐに用意してくれた。龍彦は葬式の事後処理も落ち着いた大木家を訪問し、真新しい位牌の前で手を合わせた。

「わざわざいらしてくださって、ありがとうございました」

深々と頭を下げる未亡人と二言、三言の挨拶を交わし、しばらくは当たり障りのない会話を続ける。

「そういえば……」

ふと思い出した、という風に多希子が切り出したのは、三十分も経った頃だった。

「晴海さんとは、お知り合いなのですか？」

「はい。昔はよく御堂の家にいらしていましたし」

「幼馴染み？」

「そうですね」

なぜだか多希子の微笑みに、妖艶さが混じる。

「あの人、言っていませんでした？」

「え？」

「私が、大木を殺したと」

危うくお茶にむせそうになったが、何とか平静を装うのには成功した。まさかこんなに早く、本題に入れるとは。

「晴海さんは……」

「いいえ。あの人私に面と向かって言いましたもの。『おじいさんを殺したでしょう』って」

思わず呻きたくなった。晴海は大人しそうに見えて、なかなか直情的な性格らしい。

「確かに、遺産目当てで結婚したと思われても不思議はありません。

年も離れているし……あの人は――大木が私に取る態度は、端から見ると冷たい仕打ちに見えたでしょう」
未だ黒い衣装を纏う未亡人は、手元の茶碗をじっと見つめている。
「殺したりしませんよ」
ぽつりと、静かな居間に声は落ちた。
「殺すものですか。私なりに精一杯、あの人の世話をしてきたつもりだった……」
抑揚のない、しかし哀しみだけが溢れるつぶやきに、龍彦は言葉を失う。
嘘ではない。直感でそう思った。
「奥様」
襖の外から家政婦が声をかけてきて、室内の冷たい悲哀はつかの間和らぐ。
「お電話が入っております。太田様からです」
「わかったわ。――御堂さん、申し訳ありませんが、少し失礼させていただきますね」
「はい」
多希子が出て行ったあと、龍彦はこっそり溜息をついた。

「ふむ。未亡人の色香に当てられたのだな」
「人聞き悪いこと言うなよ」
先日とは違う喫茶店で、龍彦はアザゼルと落ち合い多希子とのやりとりのことをかいつまんで説明した。
アザゼルは真剣に聞いていたが、なぜか残念そうだった。
「私もその場にいたかったな。表情や仕草も判断材料になるから」
「俺が見た限りでは、嘘はついてないようだったけど」
「たっちゃんは会話の当事者だから、完全なる観察者よりはどうしても注意力がおろそかになるだろう？」
それはそうかもしれない。

「今度は私も同行しよう。次は誰から話を聞く？」
「そうだなぁ」
当事者ではなく、第三者でもなく。ほどよい距離から鈴道氏や多希子を見ていた存在といえば。
「家政婦さん、かな」
「妥当だな」
にっこりと、アザゼルは微笑み。
「『家政婦は見た』とか言うなよ」
「ばれたか」
すかさず釘を刺してやると、無念そうに肩を落とした。

5.

大木家家政婦、三田典子はふくよかな四十代の女性で、短い質問に対してもかなりの情報を付与して答えを与えてくれた。要するにおしゃべり好きなのだ。晴海に多希子の外出予定を調べてもらい、その隙に訪ねていった龍彦とアザゼルが数分雑談を交わして親しくなると、家政婦は気さくにいろいろな情報をもたらしてくれるようになった。

「ええ、傍目には奥様と旦那様は、そりゃあ仲がおよろしかったですよ。はい、旦那様もご結婚なされてからずいぶん明るくなって……。まあ、おそばで働いているから、わかることもあるんでしょうけど」

「奥様は、旦那様はむしろ冷たくしていたように見えるだろうとおっしゃっていたようですが」

「そりゃまあ、そうかもしれませんね。何しろ、旦那様は昔気質の御方だったから。今の人から見たら素っ気なく感じるところもあるでしょうね」

「なるほど」

「私も旦那様がご病気になってからは、もちろんお世話を手伝いましたけどね、ほとんど奥様が全部なさってましたよ。うちの子もあんな風に面倒見てくれるんだったら、私も夫も安心なんですけどねぇ……。なかなかできることじゃないですよね」

典子は、なぜか主に龍彦の方ばかり見て、いろいろと話してくれた。

「旦那様が急に具合が悪くなった日も、お世話を手伝わせていただいていたんです。最初に気づいたのは私で、旦那様のお部屋から大声で奥様をお呼びして。救急車を呼びに言ったのは奥様でした。私

に、旦那様を見ていてといって、すぐ電話まで走っていかれたんです」
「奥様は、携帯電話などは？」
龍彦も疑問に思ったことを、アザゼルが訊いた。
「お持ちですよ。でも、家の中にいてまで持ち歩くことはありませんでした。旦那様のお部屋からだと、ほら、電話がすぐそこですし」
典子は龍彦達の求めに応じ、電話まで案内してくれた。今ではあまり見かけない古風で小さな台の上段に電話、下に電話帳が数冊重ねてある。鈴道氏の部屋は、電話から数歩の所だった。
「でも……」
そこで典子は、表情を曇らせた。
「もう少し早く、救急車が来てくれたらと今でも思うんですよ」
「え？」
「連絡してから、ずいぶん遅かったんです。救急車。二十分はかかったと思います」
アザゼルが、ふっと視線を遠くへ投げた。何かを考え込んでいる様子だった。気にしつつも、龍彦は訊きたいことはすべて訊いてしまおうと次の質問を探す。何しろ、時間があまりない。
「救急指定の病院は、ここから遠いんですか？」
「長門総合病院が一番近いですが……私もこの家から行ったことはないので何とも。道の状態が悪かったんでしょうかねぇ」
家政婦は、沈痛な面持ちで首を振った。
龍彦とアザゼルは、顔を見合わせた。一つうなずき、アザゼルが手帳とペンを取り出す。
「その日の出来事を、なるべく細かく教えてください」

「救急車で二十分……」
大木家をでたあとも、アザゼルはずっと何事か考えていた。邪魔をしないように黙って横を歩いていた龍彦は、アザゼルが何に引っ

かかっているのかおぼろげながらわかるような気がした。
「歩きだけど、病院に行ってみるか」
「長門総合病院だな」
アザゼルはうなずき、二人はそのまま病院へ向かったのだが。
「……つくづく謎の多いやつだよな」
やや早足で目的地に着くなり、アザゼルは迷うことなく廊下を進み、エレベーターに乗り、外科病棟のナースステーションでようやく足を止めた。そこで二言、三言交わし、待っているとやがて白衣の青年がやってきて――どことなくアザゼルと似た雰囲気の、黒髪金の瞳の絶世の美形だった――アザゼルは龍彦と青年を引き合わせて紹介した。
「いつもアザゼルが迷惑をかけて本当に申し訳ない」
いきなり恐縮する青年に、いやいやこちらこそと挨拶し、三人はロビーに場所を移したのだった。何でもこの青年はアザゼルの身内で、この病院に勤めているらしい。ネームプレートに「アレクス・アンヘル」とあった。いったいこの方々の国籍はどこなのだろうかと思わず考えてしまう龍彦だった。
「またそういうことに首をつっこんで……」
事情を聞くと、アレクスは深々と溜息をついた。アザゼルは、彼に対してもいろいろとやらかしているようだ。
「まあ、話はわかった。その家まで救急車でかかる時間を聞けばいいんだな？」
「うむ。いやぁ、たまたまアレクスが今日担当でよかった」
「俺がいなくても、毎日誰かいるけどな」
休憩時間の終わりが迫っているのか、アレクスはあわただしく立ち上がった。
「それじゃ、夜までに聞いておく」
「頼んだぞ」
「それと……ほんとにご迷惑かけて……」
「いや、もういいから」

ものすごい勢いで恐縮しながら、白衣を翻して戻っていく青年を見送り、アザゼルはひたすら首をひねっていた。
「なぜあそこまで悲愴な顔で謝るのだ」
「……自覚という言葉を学べ」
無駄と知りつつ、言わずにいられない龍彦だった。

6.

6.

「では、あの日の出来事を詳しく再現してみようか」
昼食もかねて、龍彦達はコーヒーショップに入った。空腹が落ち着いてからアザゼルはおもむろに紙とボールペンを取り出し、タイムテーブルらしきものを書き始める。
「朝の七時。奥方の多希子が朝食を済ませる。起床時間は六時だったか。八時に病人の食事などの世話。そして八時半には家政婦の三田さんがやってくる」
「ああ」
龍彦も、さっき大木家へ行ったとき、典子の話を書き留めておいた。それを見ながら、時間ごとの図に書いていく。

午前

六時　――多希子起床。
七時　――多希子食事。
八時　――鈴道氏朝食など。
八時三十分――三田典子がやってくる。
その後正午まで特に何もなし。

午後

十二時過ぎ――晴海が見舞いにやってくる。
十二時五十三分　鈴道氏の容態が悪化、多希子が救急に電話をかける。
「救急車の正確な到着時刻はわからないが、この二十分後だとして……」
「だいたい、一時十分から十五分の間か」

大木家から長門総合病今での、歩いた場合の所要時間は、およそ三十分。救急車は信号に止められないから、よほど道路が渋滞していない限り、やはり二十分というのは時間が掛かりすぎている気がする。

「当時の道路状況も調べるか……。あの辺りの店で、覚えている人がいればいいんだけど」　「うん。私も調べてみよう。それから、別方面からも調査が必要だな」

「別方面？」

「うむ」

アザゼルの緑の目が、すっと細くなる。それだけのことなのに、なぜか龍彦の胸はざわついた。

「大木氏は資産家だった。こういう場合の調査ポイントといえば……」

「……なるほどな」

不本意ながら、全国津々浦々で様々な殺人事件に関わり、また解決に導いてきた龍彦だ。人を殺める目的――その因果関係も知りすぎるくらいに見てきた。

ある程度の財産をもつ者の死に、疑惑がある場合は……。

「その人物の死により、誰が特をするのか、だな」

「そうだ」

一瞬だけ、表情が暗くなったのを見られたのかもしれない。

直後龍彦の髪に触れたアザゼルの手は、切なくなるほど温かだった。

7.

予想以上に、大木鈴道という人物は死を望まれていた。正確には、それによってもたらされる財産を。

かなり時間をかけてわかったのは、妻の多希子、娘や息子の家族、そして他の親類縁者に至るまで、大木氏の遺産を喉から手が出るほどほしがっていたということだった。

「奥方は、大木氏の生死であまり損得が生じないようだが」

「そうだな」

今日は龍彦のアパートで会合を開いている。話の内容が内容なので、なるべく人目は避けたかった。

「彼女も遺産がもらえるけどな。あ、でも……病気の介護は大変だから……」

「それから開放されたかった、か。だが、家政婦の証言では、実にかいがいしく世話をしていたようだ」

三田典子の証言だけになるが、夫婦仲は悪くなかった上、多希子は介護をそれほど苦にはしていなかったらしい。

「晴海さんはどうなのだ？」

「え？」

調査メモを見ながら考え込んでいた龍彦は、はっと顔を上げる。意識的に触れるのを避けていた事柄だが、やはりアザゼルには隠し通せなかった。

「晴海さん……親しい人のことだから、考えたくないのはわかるが」

「……」

「見てもいいか？」

気遣う調子のアザゼルに、龍彦はメモを渡す。口で言うのはやはり苦痛だった。

祖父の死を悲しみ、その原因に憤りをあらわにしていた彼女だが、情報が集まるほどに信じられないことが浮き彫りにされていった。
彼女と祖父の仲は、最悪だったらしい。この数年で悪化し、互いに行き来もしなかったというのだ。
加えて、直接ではないが彼女も遺産の恩恵を受ける。金銭的な問題であきらめかけていた、海外への留学もそのおかげでできるのではないかと、彼女を知るものは言っていた。
「……容疑者が多すぎる。あとは、救急車の情報を待とう」
気持ちがそのまま顔に出ていたのだろうか。アザゼルの手がそっと背中に触れてくる。慰めるような温かさが少しだけ心を和らげてくれた。
こんな風に、親しげに触れてくれる手はしばらくご無沙汰だ。一度限りの関係をもつ女は時折いるが、龍彦が本当の意味で恋人を得ることはほとんどない。初めて愛した人に手を伸ばすことが不可能で、けれどそれを受け入れて密かに想いを向け続けたことが、未だに尾を引いているのだろう。
「あ、救急車だ」
窓の外をサイレンの音が、微妙に調子を変えながら通り過ぎていった。よりによってずいぶんな符丁だと思いながら、何とはなしに龍彦は散らばったメモを片づけ始めた。
「そういえば、救急車は救急受付をしている病院にしか行けないのだな」
「ん？」
「アレクスにも聞いたのだが、最近は医者が減っていて、救急外来で受け付けてもらえる病院も少なくなっているそうだ。この辺りは長門総合病院でまだ受け入れてもらえるが」
「ああ、ニュースにもなってるよな。やっぱ病気とか怪我のことだから、深刻だよ。知り合いの記者もそのこと記事にしてた」
長門総合病院は、ありがたいことに医者も看護婦も十分足りていて、おまけに患者の快復率が桁外れに高いという噂もあったりして、

この町だけでなく近隣からも頼りにされている。特に外科は腕利きが揃っているらしい。龍彦は幸いというか何というか、まだその話を確かめる機会がない。

「ん？」

不意に、アザゼルがズボンのポケットをごそごそしだした。メールか何かが来たらしい。ディスプレイを一瞥して、軽やかにボタンを操作していた細い指が、何かに驚いて止まった。

「……たっちゃん」

「どうした？」

口調の深刻さに気圧され、呼び方の訂正もできずに龍彦は問い返した。

「大至急、大木家へ行こう。救急車のことがわかった」

切迫した声と表情に、龍彦は真実が明らかになる時が近づいたのを悟った。

8.

救急車は、一時十分に出動していた。
通報を受けたのは、一時ちょうど。
「どういうことだ？」
「五十三分に電話をかけられない理由があったのだ」
龍彦とアザゼルは、大木家へ急いでいた。何か嫌な感じがする。
一一九番へかけるのに、病人の容態が変わってから十分もブランクがあるのは、なぜだ。
「あら……」
幸い多希子がすぐに出てきてくれた。龍彦は手短に、しかしきちんと挨拶をし、ことの次第を説明した。
「そんな……十分近くですって？」
多希子は、真っ青になって口元を指で覆う。今にも倒れそうな風情に龍彦は質問を呑み込んでしまったが、代わりにアザゼルが尋ねた。
「電話をしたのはあなたではないのですか？」
「ええ……それが」
身体を手で支え、彼女は口ごもった。
「何か気にかかることが？」
「それが……実はあのとき、私も気が動転していまして。ひどいめまいに襲われたのです」
「めまい？」
「ええ。最近血圧が少し」
では、高血圧の薬はやはり彼女のためのものだったのだ。
「晴海さんが、自分が代わりに電話をするといってくれたので、私は薬を飲みに行きました。五分ほどで主人の部屋へ戻って、そのあ

とはずっと付き添っておりました」
もし。
もしも、彼女が嘘をついていないのなら。
大木が死んだのは。彼を『殺した』のは――。
知らずに握りしめていた龍彦の拳を、アザゼルの白い手が柔らかく包み込んでくれた。

何も連絡せずに行ったが、晴海は自分の部屋にいた。龍彦とアザゼルの雰囲気から、彼女は何かを察したようだった。
「……なぜ、十分以上救急車を呼ずにいたんですか？」
前置きを一切省いた唐突な質問にも、彼女は動じずにまっすぐ龍彦の視線を受け止めていた。
「チャンスだと思ったんです」
窓辺に寄りかかり、彼女は言った。
「祖父は、私のやることなすことにとにかく口を出したがる人で。小さい頃は怖いから言うことを聞いていたけど、もう私は大学生なのに女は早く結婚しろとか、家事を身につけるだけでいいとか、本当にうるさくてうんざりしていたんです」
彼女は目をそらさない。瞳は微塵も揺らがない。
「多希子さんが具合を悪くして、薬を飲みに行ったのを見て、このまま少し救急車を呼ぶのを遅れさせれば、もしかしてと思った。本当にそうなったからびっくりしたけど」
「賭けだったのか」
「そうですね」
ゆっくりと、彼女はアザゼルの方へ視線を移動させた。
「これって完全犯罪じゃないですか？　私は直接何もしてないんだから」
「見破られた時点で、完全犯罪などではない。あのとき龍彦や私に何も言わなければ、天命が尽きたのだと誰もが思っていたはずだが

な」
確かにその通りだ。大木氏は老齢だったのだから、病魔に勝てなかったのだと龍彦も思っていたのだ。
「なぜ、わざわざ俺にあんなことを言ったんですか？」
事件を匂わせるような、あんな言葉を。
晴海は。
「それは……」
平静そのものだった彼女が、初めて感情のさざめきを見せた。何かを探しているような、躊躇い。
「そう……確かめたかったのかもしれません」
「確かめる？」
「私のしたことは正しいって。私は望みを叶えるために、こうするしかなかったんだって」
言葉の最後が、その場を閉ざした。誰も何も言わず、動こうともしなかった。
重苦しく、永遠に等しいとすら思える空気を壊したのは、緑の瞳の佳人だった。
「行こう、龍彦」
龍彦の手を引いて、アザゼルは玄関へ向かう。
「あの……」
追いかけてきたのは、晴海の声だけ。振り返ることもできずにいる龍彦をかばうように、アザゼルはその声と彼の間に立ちふさがった。
「あなたは間違いなく殺した。あの人を」
背中を見えない何かに打たれた気がした。龍彦に向けられたものではないのだろうに。
厳かで、ただ静かな言葉を残し、アザゼルは今度こそ立ち止まらず、龍彦を外へ連れ出した。

多希子にことの真相を話せば、なにがしかの動きはあるかもしれない。救急への通話記録という証拠もある。
しかし、とにかく今は何も考えたくなかった。
「龍彦」
ふわりと肩に掛かったそれを、どういうわけか最初は翼かと思った。
「何か食べて帰ろう」
「……寒くないのか？」
龍彦に白いコートを提供してくれたアザゼルは、問いに対してにっこり笑っただけだった。
「毛穴という毛穴から何かが出てきそうな勢いの、本場の麻婆豆腐とかはどうだろう？」
「嫌な表現だな……」
「毛根から髪の毛がすべて抜け落ちそうな勢いのビビンバでもいいが」
「どっちにしろ辛いものなのか」
他愛ないことを話していると、少しだけ気持ちが軽くなった。あるいは、わざとアザゼルはこんなことを言ってくれているのだろうか。
自分を引っ張っていく柔らかな掌を、彼はそっと握り返していた。

8．（後書き）

最終話です。ここまでおつきあいくださり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0445f/

御堂龍彦の事件簿２～ある老人の死～

2010年10月8日15時56分発行